



# ウティット・ヘーمامーン×岡田利規×塚原悠也 「プラータナー：憑依のポートレート」

presented by 国際交流基金アジアセンター

見つめる人間と、見つめられる人間



宣伝美術・写真 松見拓也

あなたに憑依するものは、何—？

孤独に群れて漂よう わたしたちの物語

2019年6月27日（木）～7月7日（日）

東京芸術劇場 シアターイースト

特設ウェブサイト [pratthana.info](http://pratthana.info) <4月上旬 本公開予定>

## お問い合わせ

株式会社precog

Tel: 03-6825-1223

Email: [info@precog-jp.net](mailto:info@precog-jp.net)

## 広報お問い合わせ

東京公演 広報担当 藤末萌

Email: [pratthana.press@gmail.com](mailto:pratthana.press@gmail.com)



東京  
芸術  
劇場  
Tokyo  
Metropolitan  
Theater

precog

## 作品について

2018年8月、バンコクで世界初演を迎えた『ブラータナー：憑依のポートレート』は、1992年から2016年へと至るタイの現代史と、そこで生きる一人の芸術家を描く物語。国家、政治対立、芸術、性愛、セックス、ポップカルチャー、そして繰り返し起こる軍事クーデター。それらが複雑に渦巻くなかで、彼は人生の幸福と孤独に心と身体を囚われ、引き裂かれながら、それでもなお生きることを望み、そして欲望するだろう。

これは、決してタイだけの物語ではない。今を生きる、私たちとあなたたちの物語。

バンコクとパリでの上演を経て、いよいよ日本凱旋初演となる2019年の東京で、この物語はどのように受け入れられ、また変容するのだろうか。

劇場での4時間という特別な時空間に湧き起こる生々しい「生」の物語に、ぜひご注目いただきたい。

### ウティット・ヘームムーン×岡田利規×塚原悠也のコラボレーションによる斬新さ溢れる大作

2014年の軍事クーデター以降タイで続く政治的混乱の中、精力的に活動を続けるウティット・ヘームムーン。現実／非現実、歴史／神話、政治／個人の間を縦横無尽に飛び回りながら、普遍的な問いに向き合う作品世界が評判となり、東南アジア文学賞やセブン・ブック・アワードを受賞している。本作の原作である『ブラータナー：憑依のポートレート』は、自身の半生を色濃く反映した最新長編小説。バンコクに暮らす一人の芸術家が体験したタイにおける政治的動乱と、彼が結ぶ性愛の関係が重ねて語られる。

この小説の舞台化にあたり脚本・演出を手がけたのは、演劇カンパニー「チェルフィッチュ」主宰の岡田利規。若者の日常的所作を捉え、現代演劇に反映する作風で世界の演劇界から注目され、今や日本屈指の演劇作家の一人だ。現代社会に鋭い視座を投げかけてきた岡田がヘームムーンの原作に強く共鳴し、コラボレーションに至る。岡田にとって小説を舞台化するのは初めてで、11名の俳優、4時間の上演など、自身最大規模の作品となった。

空間の演出やデザインを行うセノグラファーとして加わったのがcontact Gonzoの塚原悠也。殴り合いのようにみえるパフォーマンスで国内外に知られ、身体・空間・映像など様々な手法の表現を行う。本作で初めてセノグラフィーを担当し、舞台上の無数の道具や、空間と時間における人物も含めた配置やデザイン、演出に密接に関わる映像の扱いなどを岡田と模索しながら構築。さらに振付も行い、出演もする。ジャンルや手法の境界を越境し解体しながら作品を立ち上げる塚原の真骨頂がこれまでにないスタイルで現れた。

ヘームムーン、岡田、塚原のそれぞれが自身の立場にとっての新境地に挑み、新たな芸術性を獲得した点においても極めて斬新な作品なのである。



バンコク公演（2018年8月）

写真: Sopanat Somkhanngoen、左下のみTananop Kanjanawutisit

## 多彩なタイ人のキャストとエマージングなクリエイター陣により展開する上演

バンコクでのオーディションで選ばれた11人の俳優の役柄は固定されず、俳優、観客、ナレーターとなり、舞台上と観客席に語りかける独特の作品構造を見事に体現する。年齢もキャリアも多岐にわたり、演劇だけでなく、音楽や映画など多様な領域のアンサンブルが実現した。

クリエイティブチームを成すのは、タイと日本の新進気鋭のクリエイターたち。演出助手はヨーロッパで最も注目されるフェスティバルであるブリュッセルのクステンフェスティバルデザールやウィーン芸術週間にて2019年に招聘が決定している演出家、**ウィチャヤ・アータマート**。衣裳は劇団「快快」メンバーとしての活動の他、国内外の演劇、ダンス、美術、音楽家の舞台衣裳を独自の感性で手がけ、近年の岡田利規作品に多く携わる衣裳家、**藤谷香子**。照明デザインは、アピチャップン・ウィーラセクタン『フィーバー・ルーム』の照明デザインを担当し、舞台照明の概念を覆す実験的視点を持つ**ポンパン・アーラヤウィーラシット**。音響デザインはサウンドアーティストとしてインスタレーションやパフォーマンスの作品も発表する**荒木優光**。映像はcontact Gonzoで塚原と共に活動し、グラフィックデザイナーや写真家としての顔も持つ**松見拓也**。

本作は、俳優はもちろん、今後の演劇界の担い手となるに違いないクリエイター陣ひとりひとりが、上演コンセプトに密接に関わり互いに交錯しながら、展開される。

## 世界初演のバンコク、ヨーロッパ初演のパリにて、相次いだ賞賛

本作の世界初演となったバンコクの演劇シーンでは絶賛を浴び、タイの世論を牽引する全国紙 **Bangkok Post**、**The Nation**の両紙にて2018年ベスト作品のひとつに選出された。11名の俳優の演技も高い評価を受け、**タイ唯一の舞台芸術賞である演劇評論家協会タイセンター (IATC) のIATC Thailand Dance and Theatre Awards 2018のBest Performance by an Ensemble賞にノミネートされた。また、同賞においてBest Play賞を受賞。2018年にタイで上演された演劇作品としては最優秀賞を受賞するかたちとなった。**

バンコク公演に続き、**フェスティバル・ドートンヌ・パリ/ジャポニスム2018公式企画**として招聘され、2018年12月に**パリのポンピドゥ・センター**にてヨーロッパ初演を迎えた。同センター及びフェスティバル・ドートンヌ・パリでのタイ語演劇はこれが初めての上演であったため、新鮮な驚きをもって迎えられた。ヘーマムーン、岡田、塚原というアジアのアーティスト同士のコラボレーションであった点でも、ヨーロッパの観客にとってアジアのパフォーミング・アーツへの新たな扉を開いたと言えるだろう。



パリ公演 (2018年12月)

写真：松見拓也

## アジアにおける芸術家と芸術史にみるジェンダー、階級、世代、政治、芸術の境界線とは

『プラータナー：憑依のポートレート』は、タイに生きる一人の芸術家の人生を描きながら、人生を取り巻く社会状況や、「生」の普遍的な問いを突きつける。自己／他者、生／死、男／女、ある階級／別の階級、過去／未来、個人／国家、西洋芸術／その周縁の芸術史、支配する側／支配される側、欲望／その対象——現代社会を生きる上で誰もが対峙する見えざる境界線が、本作のテーマのひとつである。生きる上で葛藤の原因ともなるあらゆる境界線は、岡田と塚原が編み出す手法で、舞台／客席、現実／虚構とも混ざり合い、その場にいる者すべての体験として現れる。境界線は越えられるものなのか。それとも越えられずに存在し続けるものなのか。幾度も立ち現れる「境界線」を、どうか捉えていただきたい。



写真: Sopanat Somkhanngoan

## 演劇における「フィクション」の新たな形態

劇中劇のスタイルで展開される本作では、11名の俳優が、ある時は主人公を、ある時は主人公に関わる人物を、ある時は誰でもないナレーターを演じる。俳優たちは、休憩を挟み4時間にわたる上演を通じて舞台上に存在し、時には舞台上における「観客」としても存在。舞台上の俳優と観客席の観客との間の一方通行ではない、いくつもの関係性に重ねられる「語り」の構造を立ち上げていく。

舞台に登場するのは、俳優だけではない。通常の舞台作品では裏に控えていることの多いクリエイティブチームが、セノグラフィーの塚原悠也を中心に常に舞台上に存在。シーンの一部として登場したり、装置や道具の移動を俳優と共にやり空間を変化させたりしながら、劇中劇の構造をより際立たせる。舞台上で繰り広げられる物語は、新たな「フィクション」の形態として生まれ、塚原をはじめ「出演者」ともなるクリエイティブチームの存在は、その骨組みを見せる役割を果たしている。

交錯する複数の関係性と幾重の構造により生み出され、その瞬間をも露わにする本作は、観客の「鑑賞する側」としての態度を揺るがす。4時間の上演後、この「物語」を引き継ぐのは、「見ている」はずであった観客なのだ。

### 「見つめる人間と、見つめられる人間」

舞台上の物語を鑑賞することに留まらない、演劇という表現形式における新規の鑑賞体験が得られるに違いない。

## バンコク公演レビュー抜粋

歴史に蹂躪され、ズタズタに、バラバラにされた「地理的身体」は、あの時、舞台上に存在していた全ての生身の身体たちによって再現されていた。いや、私たちもその一部になっていたのかもしれない。

—佐々木敦（地理的身体たちの演劇 岡田利規『プラータナー：憑依のポートレート』観劇記「すばる」2018年12月号より）

個人史と近代国家の成り立ちが重なって見える。タイの具体的な近代史が描かれるが、観た人の多くは自分が暮らす国について思いを巡らすはずだ。

—徳永京子（タイで共振した岡田利規の世界「朝日新聞」2018年9月6日号より）

<https://www.asahi.com/articles/DA3S13667855.html>

4時間に及ぶ『プラータナー』の上演は、自分探しの長い旅へと変わっていくのかもしれない。曖昧な「私」のアイデンティティと居場所を求めて、カオシン（あなた）はバンコクを漂流する。

—島貫泰介（「あなた」の人生の物語「『プラータナー』バンコク公演公式Webサイト」より）

[http://pratthana.net/news-ja/features-ja/bangkok\\_review/](http://pratthana.net/news-ja/features-ja/bangkok_review/)

原作小説のように、この作品は洗練されており、自由と抑圧、個人と服従、セックスとアイデンティティといった、通常の演劇とは全く異なる形式の問いかけと、性的なトピックで観客を魅了する。

—Amitha Amranand（[“Pratthana - A Portrait of Possession”: Of Politics and Desire ] Artsequator より）

<https://artsequator.com/pratthana-review/>

## ウティット・ヘーمامーン インタビュー

インタビュー／ASIA HUNDREDS（アジア・ハンドレッズ） <https://ifac.jp/culture/features/f-ah-uthis-haemamool/>

『ウティット・ヘーمامーン——ひとりの物語から、拡張する芸術へ』

## あらすじ

原作小説『プラータナー：憑依のポートレート』（ウティット・ヘーمامーン著）

タイ語タイトル “Rang Khong Pratthana”（英語“Silhouette of Desire” 2017年6月 Juti出版）

2016年、バンコクに住む画家のカオシンは、Facebookを通じて連絡してきた若者ワーリーを自らのモデルとして迎え入れる。モデルは命を持つべきではないとの考えのもと、カオシンはワーリーと関係を結ぶことを拒みながら、その姿を描き続け、同時に自らの過去の性愛をワーリーに語って聞かせる。1991年の軍事クーデター・翌年の「暴虐の5月」と女性詩人、1997年のアジア通貨危機と芸術大学の同級生、2006年の軍事クーデターと帰国子女の若い女性アーティスト、そしてレンタルビデオ屋の男性店員との三角関係。カオシンが人々と紡ぐすべての関係が身体・欲望・芸術のあり方をめぐって描かれ、その後景には常にタイの政治が存在する。ワーリーとの関係の背後にも、2014年の軍事クーデターがある。自分の描く絵の中に永遠を捉えておきたいと願うカオシンだが、その一方ですべての人々がカオシンの元から去っていく。人間の身体と、国家という身体の輪郭と欲望を、タイにおける政治・芸術・サブカルチャーの変遷を通じて描く長編小説。



2017年6月に出版された原作小説（左）  
ウティット・ヘーمامーンが同小説の創作にあたり描きためた  
ドローイングにより構成された“Sketches of Desire”（右）

※作品タイトルの「プラータナー」は、ウティット・ヘーمامーンによる原作小説のタイトルで言及されるタイ語で、「Desire=欲望」の意。「望み」の意もある。原作小説タイトルは英語で「Silhouette of Desire」を意味する。

## アーティストステイトメント

### ウティット・ヘーマムーン（原作）

自身の作品が舞台演劇に翻案されていくさまを目にすること。それは喜びをはるかに上回る経験だ。心中の欲望が、現実のものになったのだから。抑圧され、語ることもできず、語らせてももらえず、自由を欠いたこの社会で、挑戦的であると見なされ、禁じられているものが、この物語には満ちている。非常に脆く、鋭いものが。この作品に信頼が寄せられて、岡田利規という、芸術的創造の思考と視点を十全に備えた演出家の手に渡り、舞台演劇へと脚色される。禁忌と挑戦が、ぼくたちの心を捉えるものになる。

ぼくたち二人は芸術家だ。民族、それぞれが住む社会、コミュニケーションの言語がどのように異なっているように、創作を始めれば、共通点が生まれる。一脆く、危険な、針金を這い登っていく。演劇の如きしぐさと身のこなしを生み出すために。美しく生きるために—芸術創造の中で。

だからこそ、なにがあるうとも、この舞台作品を見逃すべきではないのだ。

2018年6月 ウティット・ヘーマムーン

### 岡田利規（脚本・演出）

ウティット・ヘーマムーンによって紡がれた、怒りと悲しみから生み出されたエネルギーに充ち満ちている小説、現代のタイの社会に生きる芸術家の半生における性愛の遍歴が、芸術との遍歴が、そして、激しく揺れ動き続けるタイの政治状況・社会状況の中で格闘し、消耗し、スポイルされて無気力になっていく様子が描かれた、おそろしく濃密度で、挑発的で、痛々しいまでに切実な小説。それを原作にして、演劇をつくらうとしている。

わたしたちが身体に囚われて生きていること。身体の欲望に囚われて生きていること。国家に囚われて生きていること。国家の欲望に囚われて生きていること。それらのものに囚われるしかないまま、わたしたちが生と闘って、疲れて、歳をとっていくこと。そのことを、演劇の上演として、体現させようと考えている。誰も見たことのないような形式の演劇をつくりだすことによって。

2018年6月 岡田利規

### 塚原悠也（セノグラフィー・振付）

最近、90年代の頃をよく思い出す。自分が14歳のころが93年で、20歳が99年。94年がアメリカW杯で98年がフランスW杯。90年代と現在とではサッカーは全く異なるスポーツだ。それはおそらく僕らの所作にも言えることで、歩き方や、だべり方、人々の距離感など、最近ずっと考えている。懐かしさ、だけではなく、現在を理解するための「原因」のような要素がこの時代にたくさんある。そんなことはこれまで思っただけではなかった。ほぼ盲点。ペラペラのユーロビート。テレビに映る政治家の所作。ビデオデッキにガチャガチャと吸い込まれるポルノのVHS。やっとそういうものが作品化される時代が来た。かといってぼくはやはり自分の仕事として全力でこれらを解体したい。

2018年7月 塚原悠也

## プロフィール

**原作：ウティット・ヘーナムーン Uthis Haemamool**

1975年タイ中央部サラブリー県ケンコーイ生まれ。バンコクのシラパコン芸術大学 絵画彫刻版画学部卒業。2009年に発表した3作目の長編小説『ラップレー、ケンコーイ』（The Brotherhood of Kaeng Khoi）にて作家としての地位を確立、同年の東南アジア文学賞とセブン・ブック・アワードを受賞。CNGoにて、タイで最も重要な人物の一人として掲載された。2013年、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAで実施されたアーティストワークショップ「Work in Memory」に、映画監督のアピチャップン・ウィーラセタクンと共に招聘講師として参加。同ワークショップに参加した日本のアーティストとの交流を通じて執筆した中編小説『残り香を秘めた京都』を発表。2014年から2015年までタイの文芸誌「Writer Magazine」及びタイ国文化省現代芸術文化局発行の文芸誌「Prakod」編集長。2017年『プラータナー：憑依のポートレート』（タイ語原題「Rang Khong Prathana」、英訳「Silhouette of Desire」）を発表、同年バンコクにて自らのドローイングと絵画による展覧会「Silhouette of Desire」開催。2018年、タイ文化省よりSilpathorn Award 文学部門受賞。

**脚本・演出：岡田利規**

1973年横浜生まれ、熊本在住。演劇作家／小説家／チェルフィッチュ主宰。活動は従来の演劇の概念を覆すとみなされ国内外で注目される。2005年『三月の5日間』で第49回岸田國士戯曲賞を受賞。同年7月『クーラー』でTOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2005一次代を担う振付家の発掘一 最終選考会に出場。2007年デビュー小説集『わたしたちに許された特別な時間の終わり』を新潮社より発表し、翌年第二回大江健三郎賞受賞。2012年より、岸田國士戯曲賞の審査員を務める。2013年には初の演劇論集『遊行 変形していくための演劇論』、2014年には戯曲集『現在地』を河出書房新社より刊行。2016年よりドイツ有数の公立劇場ミュンヘン・カンマーシビューレ（ドイツ）のレパートリー作品の演出を3シーズンにわたって務めた。（撮影 宇壽山貴久子）

**セノグラフィー・振付：塚原悠也**

1979年京都市生まれ、2004年関西学院大学文学研究科美学専攻修了。現在、大阪市在住。2006年にダンサーの垣尾優と共に「contact Gonzo」を大阪にて結成。公園や街中で「痛みの哲学、接触の技法」を謳う、殴り合いのようにも見える即興的な身体の接触を開始。個人名義の活動としては、2014年にNPO法人DANCE BOXの『アジア・コンテンポラリー・ダンスフェスティバル 神戸』や、東京都現代美術館の『新たな系譜学をもとめて 跳躍/痕跡/身体』展などでパフォーマンス・プログラムのディレクションを行う。また2014年より丸亀市猪熊弦一郎現代美術館にて始まったパフォーマンス企画「PLAY」にて『ヌカムリ・ジャミポス3部作』と名付けたパフォーマンス作品を3年連続発表。2011年～2018年、セゾン文化財団フェロー助成対象アーティスト。（撮影 志賀理江子）

**演出助手：ウィチャヤ・アートマート Wichaya Artamat**

1985年バンコク生まれ。タマサート大学映画専攻を卒業後、バンコク演劇祭のプロジェクコーディネーターとして舞台芸術に携わる。2009年に「New Theatre Society」に参加、演出における様々な実験的試みや、型にはまらないアプローチで評価を得る。特定の期間を通して社会がどのように歴史を覚えているか、またいかに忘れてしまうかを、様々な創造的な分野の人々とコラボレートすることによって探求することに強い関心を持つ。現代社会の現象や演劇形態それ自体に疑問を投げかけるためのプラットフォームとして、2015年「For What Theatre」を共同設立。2019年5月には「This Song Father used to Sing / Three Days in May」がクンステンフェスティバルデザール（ブリュッセル）、ウィーン芸術週間にて上演されることが決定している。

## 出演者プロフィール

出演者ポートレート写真撮影：松見拓也

**ジャーナン・パンタチャート Jarunun Phantachat**

チェンマイ大学マス・コミュニケーション学部を卒業。バンコクを拠点とするフィジカル・シアター・カンパニーB-floor theatreの共同設立者であり、共同芸術監督を務める。演出家に加え、ダイナミックな身体パフォーマーとしても活動し、カンパニー作品への出演のほか、ドイツ、日本、シンガポール、韓国、アメリカなどで国際共同製作作品にも多数関わり、“タイで最も素晴らしい女優”と評されるなど、高い評価を得ている。2014年、タイ文化省よりSilpathorn Award受賞。2016年、ショートフィルム“Ferris Wheels”での演技によりショートショート映画祭&アジア2016にて映画最優秀俳優賞受賞。

**ケーマチャット・スームスックチャルーンチャイ****Kemmachat Sermsukcharoenchai**

1988年生まれ。チュラロンコン大学工学部出身。在学中に舞台照明を学び、演劇活動に携わる。バンコクの劇団「Democracy Theatre Studio」メンバーであり、俳優、テクニカルマネージャー、照明デザインを務める。俳優としては、B-floor Theatre共同芸術監督のテーラワット・ムンウィライによる“Fundamental”、バンコクの劇団New Theatre SocietyのPannrut Kritchanhai による“Jap Rok – imaginary Invali”などに出演。

**クワンケーオ・コンニサイ Kwankaew Kongnisai**

女優、パフォーマー、歌手、声優。バンコク大学にてパフォーマンスアーツの学士号取得、オーストラリアン・インスティテュート・オブ・ミュージックにてポストグラデュエート・ディプロマ取得。ミュージカルに多数出演のほか、映画出演、アニメの吹き替えなども手がける。New Theatre Society “The Trail after Kafka’s “ (2014)、バンコクの「トンロー・アートスペース」で上演された Damkerng Thitapiyasak演出 “Dans Le Noi” など小劇場作品にも参加。

**パーウィニー・サマッカブット Pavinee Samakkabutr**

タマサート大学演劇学科、チュラロンコン大学スピーチ・コミュニケーション&パフォーマンス・アーツ学科卒業。劇団「Democracy Theatre Studio」共同創設者であり、俳優、照明デザイン、プロデュースを務め、新世代の演劇人や観客創出に尽力している。Adjima Na Pattalung, Nikorn Saetang, Pradit Prasarthong, Wichaya Artamat、平田オリザ、矢内原美邦など多くの演出家の作品に俳優として参加、高い評価を得ている。バンコク国際児童演劇祭2016、2018のオーガナイズを担当。

**ササピン・シリワーニット Sasapin Siriwani**

俳優、演出家、プロデューサー。チュラロンコン大学で英文学の学士号及び修士号を取得、在学中に演劇活動を始める。B-Floor Theatreメンバーとして国内外で活動。2013年より演出家として自身の作品を発表、最近作はIATC Thailand Dance and Theatre Awards 2017にて最優秀女優賞を受賞した“OH! ODE” (Oh! What Joy, What Goodness, What Beauty Calls For Ode No.7012)。B-Floor Theatreでプロジェクト・マネージャーとして、また個人としてもインディペンデントに多くの国際プロジェクトに携わる。バンコク国際舞台芸術ミーティング (BIPAM) 2018 アーティスティック・ディレクター。



## 出演者プロフィール

**タップアナン・タナードウンヤワット Tap-a-nan Tandulyawat**

俳優、テレビ脚本家、作家。チュラロンコーン大学コミュニケーション・アート学部卒業。パスカル・ランベール演出作品などに出演、ミュージカル、テレビ映画にも出演のかたわら、自らの演出作品も手がける。

**ティーラワット・ムンウィライ Teerawat Mulvilai**

1973年生まれ。B-Floor Theatre共同創設者・共同芸術監督。パフォーマー、ダンサー、フィジカル・シアター作品の演出など多岐にわたる活動を展開。造形芸術と舞台芸術を融合させ、社会と政治における暴力や不公平さ、構造の問題を扱いながら批評的な作品を創作。現代タイにおける最もクリティカルかつ社会性の高い演出家と評されている。2012年、長年にわたる平和、民主制、正義への貢献にあたりPiti Silp Santhi Dhamma Awardsを受賞。2018年、タイ文化省よりSilpathorn Award受賞。

**タナポン・アッカワタンユー Thanaphon Accawatanyu**

1992年生まれ。タマサート大学ジャーナリズム・マスコミュニケーション学部卒業。2014年、演劇カンパニーSplashing Theatre を共同創設。これまでほぼ全作にて作・演出を務める。映画を学んだバックグラウンドから、自作においては映画作品をモチーフに現代社会の人間像を描くことが多い。IATC Thailand Dance and Theatre Awards 2016にて“The Disappearance of the Boy on a Sunday afternoon”がBest Play賞と最優秀脚本賞を受賞。

**トンチャイ・ピマーパンシー Thongchai Pimapunrui**

「Splashing Theatre Company」共同創設者、俳優。タマサート大学政治学部在学中、演劇クラブで演技経験を積む。ダンス、フィジカル・シアター、ミュージカルなど多様なジャンルにわたる舞台作品に参加、B-Floor Theatre, Anatta Theatre Troupe作品にも俳優として出演している。IATC Thailand Dance and Theatre Awards 2016にて最優秀男優賞を受賞。

**ウェーウィリー・イッティアナンクン Waywree Ittianunkul**

チュラロンコーン大学芸術学部卒業。パフォーマーとして、B-Floor Theatre、Democracy Theatre Studioの作品に参加している。近年の活動では、Democracy Theatre Studio “Happy Hunting Ground” (タイとドイツのコラボレーション作品、2016)に参加、バンコク公演の他ドイツ、スイス公演に参加。2015年B-Floor Theatre “Manoland”、2014年にバンコク、仙台、東京で上演された子供向け作品“yoo-dee”にも出演。

**ウィットウィシット・ヒランウォンクン Witwisit Hiranyawongkul**

パフォーマー、俳優、歌手、ソングライター、文筆家。タイ映画『Love of Siam』主役として一躍東南アジアで注目を集め、ソロアーティストとしても『PCHY』名義でタイや中国にてアルバムをリリース。近年は舞台俳優活動も積極的に行う。IATC Thailand Dance and Theatre Awards 2016にてオリジナルミュージカル“Cocktails”が最優秀ミュージカル賞と最優秀男優賞を受賞。2018年、自身が脚本を務めた一人芝居 {private conversation} : A Farewell To Love Of Siam”がIATC Awardsにて‘Best Adapted Script For A Performance / Play’を受賞。

## 公演詳細

響きあうアジア2019

ウティット・ヘーナムーン×岡田利規×塚原悠也

「プラータナー：憑依のポートレート」

presented by 国際交流基金アジアセンター

原作：ウティット・ヘーナムーン（"Rang Khong Pratthana"）

脚本・演出：岡田利規

セノグラフィー・振付：塚原悠也

演出助手：ウィチャヤ・アータマート

出演：ジャールナン・パンタチャート、ゲーマチャット・スームスックチャルーンチャイ、クワンケーオ・コンニサイ、パーウィニー・サマッカブット、ササピン・シリワーニット、タップアナン・タナドゥンヤワット、ティーラワット・ムンウィライ、タナポン・アッカワタンユー、トンチャイ・ピマーパンシー、ウェーウィリー・イッティアナンクン、ウィットウィシット・ヒランウォンクン

衣裳：藤谷香子

照明：ポーンパン・アーラヤウィーラシット

音響：荒木優光

セノグラフィーアシスタント・映像：松見拓也

舞台監督：大田和司

脚本翻訳：ムティター・パーニッチ

脚本翻訳協力：パタラソーン・クーピパット、マッタナー・チャトゥラセンパイロート

原作翻訳・日本語字幕制作：福富渉

英語字幕翻訳：オガワアヤ

通訳：パタラソーン・クーピパット

統括プロデューサー：中村茜

プロダクション・マネージャー：川崎陽子

宣伝美術・写真：松見拓也

広報企画協力：AWRD

主催：国際交流基金アジアセンター

共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

企画制作：株式会社precog

製作：国際交流基金アジアセンター、株式会社precog、一般社団法人チェルフィッチュ

作品制作助成：アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、公益財団法人セゾン文化財団

協力：チュラロンコーン大学文学部演劇学科、シーナカリンウィロート大学 College of Social Communication Innovation、Democracy Theatre Studio、contact Gonzo、B-Floor Theatre、FAIFAI、Splashing Theatre Company、For What Theatre

公演日時 2019年6月27日（木）～7月7日（日）

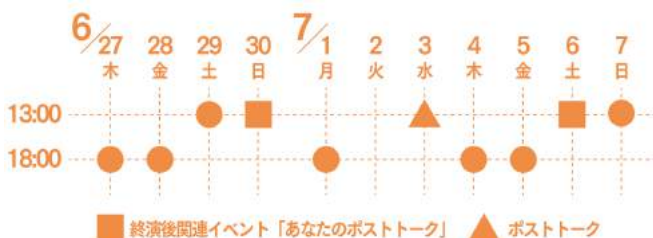
会場

東京芸術劇場 シアターイースト

〒171-0021 東京都豊島区西池袋1-8-1 TEL 03-5391-2111

JR・東京メトロ・東武東上線・西武池袋線

池袋駅西口より徒歩2分 \*駅地下通路2b出口と直結



\*上演時間：240分（休憩20分含む）休憩中にドリンクやフード販売あります！

\*上演言語：タイ語（日本語・英語字幕付き） \*受付：開演の1時間前

\*あなたのポストトークについてはP12参照、ポストトーク詳細は特設ウェブサイトにて

## チケット料金

>> 2019年4月21日（日）10:00 一般発売開始！

全席指定・税込

一般前売 4,000円

当日 4,500円

29歳以下\* 2,500円

学生\* 1,500円

障がい者\* 1,500円

\*前売・当日共に同料金。証明書を受付にて要提示

>> その他、お得な割引チケットは4月上旬ウェブサイトにて情報公開予定！

## チケット取扱い

- ・ precog (Peatix) <http://precog-jp.net/tickets>
- ・ 東京芸術劇場ボックスオフィス  
<http://www.geigeki.jp/t/> (PC)  
<http://www.geigeki.jp/i/t/> (携帯)  
 TEL：0570-010-296 (休館日を除く10:00～19:00)
- ・ チケットぴあ (Pコード：493548)  
<https://t.pia.jp>  
 TEL：0570-02-9999 (音声ガイダンス24時間受付)  
 セブン-イレブン・チケットぴあ店舗でも直接販売
- ・ ローソンチケット (Lコード：30013)  
 予約受付電話番号：0570-000-407 (オペレーター対応/10:00～20:00)  
 インターネット：<https://l-tike.com/pratthana>  
 店頭販売：ローソン・ミニストップ店内Loppiで直接購入いただけます。

## 特設ウェブサイト

[pratthana.info](http://pratthana.info) <4月初旬 本公開予定>

@precogjp   

## 本リリース内の画像データ

ダウンロードいただけます：<https://www.dropbox.com/sh/kxmcq69uvbl7cu0/AAD3Lnx5lItluSUVHAKmmrTOUa?dl=0>



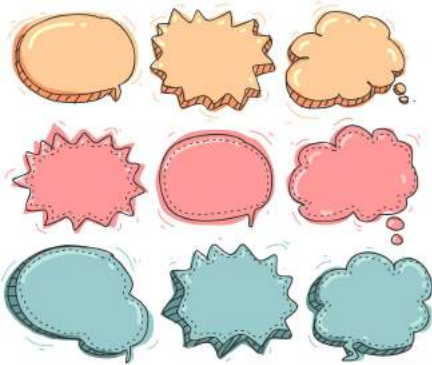
「響きあうアジア2019」は、設立5年を迎える国際交流基金アジアセンターが日本と東南アジアの文化交流事業を幅広く紹介する祭典で、主に2019年6月から7月にかけて開催いたします。国を超え共に創り上げた舞台芸術、映画から、東南アジア選抜チーム「ASIAN ELEVEN」と日本チームによるサッカー国際親善試合、「日本語パートナーズ」のシンポジウムまで、珠玉のイベントの数々を楽しめる機会です。なお、「響きあうアジア2019」は、同年に東南アジアでも展開予定です。

## 演劇の新しい届け方：観客創出プロジェクト

鑑賞者の“当事者性”を刺激する演劇広報とは。

いま劇場にいる人にはより深く、いない人には様々な入り口を用意して  
演劇の楽しみ方を伝えます。

### あなたのポストトーク



観客自身が感想を共有しあう「あなたのポストトーク」を開催。  
観劇後に行われるポストトークの対象者を観る側にも広げ、観客の主体性を刺激し、観劇文化をアップデートするための試み。

日程：6月30日（日）・7月6日（土）終演後 全2回開催

時間：17:30～19:00頃（公演は13:00開演・17:00終演）

場所：東京芸術劇場

ファシリテーター：

臼井隆志（ワークショップデザイナー）

AWRD公募にて選ばれたファシリテータースクール生

### タブロイド発行



ビジュアル制作：関川航平

安心して公演に迷い込むためのガイドを、遊び心あふれるタブロイドとして制作中。「いま劇場にいない人」に公演情報を届けるためのツールであり、当日パンフレットとしても機能する。演劇広報物の新たなあり方を模索中。

配布開始：4月26日（金）～

配布場所：関東近郊の大学、書店、ギャラリー、カフェ等にて無料配布

<編集チーム>

企画・ディレクション：中村茜

編集長：臼井隆志

ビジュアル：関川航平

ライティング：あかしゆか

デザイン：藤井 瑤

マネジメント：藤末 萌

### 関連書籍発売

・原作小説 ウティット・ヘーマムーン 著/福富渉 訳『プラータナー：憑依のポートレート』

河出書房新社より6月刊行予定

購入予約受付中：<http://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309207681/>

・プラータナー：憑依のポートレート～記録集

島貫泰介 編集/松見拓也 写真 6月刊行予定 詳細はウェブサイトにて発表

プラータナー×AWRD (アワード) 4つの公募企画

# AWRD



### What is AWRD ?

「AWRD (アワード)」は、クリエイティブな発想と世界中のプロジェクトをつなぐオープンプラットフォーム。コンペ、チャレンジ、ハッカソン、ピッチイベントなど多彩なプロジェクトを通じて、才能と才能をつなぎながら、新しい価値を生み出します。

### Why AWRD ?

株式会社ロフトワークやFabCafe Globalによるネットワーク。各地の専門知識豊富なスタッフや、各地のコミュニティが企画をバックアップします。

### How to AWRD ?

誰でもアワードを主催できる「My AWRD editor」が今夏リリース予定！オープンなものづくりをサポートする仕組みを、誰もが使える未来はもうすぐです。

(詳細 <https://awrd.com/> AWRD事業に関するお問い合わせ：awrd@loftwork.com)

今回「プラータナー：憑依のポートレート」では、

- ①WSファシリテータースクール      ②演劇グラフィックレコーディング
- ③観劇レビュー公募 短文編          ④観劇レビュー公募 長文編

の4つのAWRDコラボレーション企画を通じて、演劇の新しい届け方と広げ方にチャレンジします。

## 5月10日(金) プラータナー×AWRD 公開イベント開催決定！！

- ① WSファシリテータースクール
- ② 演劇グラフィックレコーディング

上記の公募へ参加検討されている方に向け、どなたでも参加可能な説明会イベントを開催致します。

作品解説、制作背景解説、WSファシリテーションの「いろは」など、スクール・ワークショップ参加者に対するレクチャーを公開で行います。

このイベントに参加するだけでも、プラータナーへの理解がいっそう深まること間違いなし！普段見慣れていない方でも安心して演劇の世界に飛び込んでいけるよう、入り口づくりを行います。

[開催概要]

情報公開：4月22日(月)

日程：2019年5月10日(金)

時間：18:00 - 20:00 (17:30 開場)

場所：loftwork 2F / FabCafe MTRL

住所：渋谷区道玄坂1丁目 22-7 道玄坂ピア 2F

MAP： <https://goo.gl/maps/mAN9R4U5eRD2>

定員:40名 (予定)

お問合せ先：prathana.press@gmail.com

## プラタナー×AWRD（アワード）4つの公募企画 —詳細

### ① WSファシリテータースクール 参加者公募

募集人数：7名程度

対象：ワークショップファシリテーションを演劇を通じて学びたい人

観劇後に予定している「あなたのポストトーク」で、観客が感想を共有する場をつくりにあたり、そのファシリテーションをおこなう人材を育てます。

観劇したあと感想を話し合うポストトークの対象者を観る側にも広げ、観劇文化をアップデートするための試みです。



講師：臼井隆志（ワークショップデザイナー）

1987年東京都生まれ。2011年慶應義塾大学総合政策学部卒業。質的調査、ワークショップデザインの手法を用い、子ども・親子向け教育サービスの開発を行っている。子どもの居場所である児童館にアーティストを招聘するプログラム「アーティスト・イン・児童館」の企画・運営（2008～2015）、ワークショップを通して服をつくるファッションブランド「FORM ON WORDS」の企画（2011～2015）などを手がける。2015年からは伊勢丹新宿店の教育事業「cocoiku」に従事し、販売員へのファシリテーション教育、0～6歳の親子教室「ここの森」の企画開発、体験型販売フロア「cocoiku park」の企画開発などを行う。

情報公開：4月22日(月)

応募開始：5月6日（月・祝）

応募締切：5月25日（土）

結果通知：5月31日（金）

<選考後のプログラム>

- ・WS ファシリテーションレクチャー
- ・稽古見学
- ・WS ファシリテーション練習
- ・6/30（日）と7/6（土）終演後の「あなたのポストトーク」にてWSファシリテーションの実践

### ② 演劇グラフィックレコーディング参加者公募

募集人数：30名程度

対象：演劇でグラフィックレコーディングスキルを試してみたい人

6/26（木）に東京芸術劇場シアターイーストにて行われるゲネプロ（本番同様に舞台上で行う最終リハーサル）にて、ストーリーや舞台上での出来事をグラフィカルに記述する「グラフィックレコーディング」のワークショップを開催します。

グラレコ会参加者はゲネプロへ無料招待のうえ、観劇中にグラフィックレコーディングの実践、その後お互いの作品を発表し合う時間を設けます。



審査員：清水淳子（グラフィックレコーダー）

デザインリサーチャー/グラフィックレコーダー/多摩美術大学情報デザイン学科専任講師。2009年多摩美術大学美術学部卒業後、ジャンルを超えた横断的な事業を生むためのビジネスデザインに携わる中で、2013年より議論をリアルタイムで可視化するグラフィックレコーダーとして活動開始。対話の場でのビジュアライゼーションと成り立ちと意味についての研究を行い東京藝術大学美術研究科修了。著書に『Graphic Recorder —議論を可視化するグラフィックレコーディングの教科書』（BNN新社）がある。

情報公開：4月22日(月)

応募開始：5月6日（月・祝）

応募締切：5月25日（土）

結果通知：6月7日（金）

<選考後のプログラム>

- ・6/26(木)開催のゲネプロでのグラレコ会および発表会

<AWRD>

- ・全作品をAWRDにて公開
- ・受賞3作品には副賞授与

>>5月10日（金）、①・②参加希望者に向けた公開イベントを行います（前頁参照）

## プラータナー×AWRD（アワード）4つの公募企画 ー詳細

### ③ 観劇レビュー公募（短文編）

募集人数：制限なし  
 対象：演劇批評文の発表場所を求める人  
 応募テキストの言語：日本語  
 文字数：300～500文字／Twitter等からの転載可

SNSに漂う観劇レビューをAWRDに一覧化。観劇後に  
 各々の意見を述べる、その行為自体を讃える場を作ります。  
 公演期間中はいつでも投稿可能、審査員によるレス  
 ポンスやオーディエンス投票が同時発生することで、観  
 た人にはより深く作品を思い返す時間を、観ていない人  
 には様々な角度から作品を知るきっかけを作ります。

審査員：未定

情報公開：6月7日(金)

応募開始：6月26日(水)  
 応募締切：7月8日(月)  
 オーディエンス投票期間：6月26日(水)～7月8日(月)  
 結果通知：7月13日(土)

<AWRD>

- ・全作品をAWRDにて公開
- ・審査員による審査員賞
- ・一般投票によるオーディエンス賞
- ・受賞作品には副賞授与
- ・受賞作品に対する講評公開

### ④ 観劇レビュー公募（長文編）

募集人数：制限なし  
 対象：演劇批評文の発表場所を求める人  
 応募テキストの言語：日本語・英語  
 文字数：5000文字程度／未発表テキストに限る

劇評の書き手を発掘する公募プロジェクト。  
 主催者・批評家・出版社による審査、メンタリング、  
 ブラッシュアップを経て論壇デビューの機会を創出しま  
 す。次の時代の批評家を発掘するとともに、演劇批評の  
 場を活性化するための試みです。

審査員・メンター：未定

情報公開：6月7日(金)

応募開始：6月26日(水)  
 応募締切：8月4日(日)  
 審査期間：8月5日(月)～9日(金)  
 結果通知：8月10日(土) ※予定

<AWRD>

- ・受賞作品以外の作品はAWRDにて公開
- ・受賞作品はメンターによるメンタリング、  
 ブラッシュアップのうえ外部媒体に掲載
- ・受賞作品に対する講評公開

<国際交流基金アジアセンター賞>

受賞作品を英訳（英語の場合は日訳）のうえ、WEBサイト「ASIA HUNDREDS（アジア・ハンドレッズ）」に掲載

<https://ifac.jp/culture/projects/asia100/>

>> その他、掲載媒体（審査員）になってくださる方を募集中です

特設ウェブサイト

3月20日(水)ティザーサイト公開 / 4月上旬 本サイト公開：[pratthana.info](http://pratthana.info)



チケット・イベントスケジュール

